

事務局の方々、そして大会に参加して頂きました方々に感謝致します。

(News Letter No. 6より転載)

## 懇親会報告

仁科エミ

懇親会担当

(放送教育開発センター)

大会におあつまりの方々のご歓談の場として、大会初日の11月8日夜に懇親会を催しました。予想を上まわる百余名のご参加をいただき、盛大な会になりました。館日章学会長の含蓄にみちVRの本質に迫るスピーチのあと、原島博先生のユーモアあふれる音頭で乾杯、そして河口洋一郎先生等のVRアートのビデオを鑑賞をしながら、なごやかに会話がはずみました。

今回は、学術・技術・芸術が融合するVR学会ならではの会にしようと、ささやかながら趣向を用意しました。インドネシア・バリ島に伝わる青銅の打楽器アンサンブル“ガムラン”の生演奏と舞踊を、芸能山城組の特別出演でお楽しみいただくというものです。ご存知のようにガムランは「人類至高の芸術」「アジア洗練文化の極致」などと讃えられています。しかも、ガムランのもつリアリティは、現行規格の電子メディアでは伝達が困難で、そのひとつの要因はガムラン音にふくまれる可聴域をこえ100kHzにおよぶ聞こえない高周波にあることがわかってきています(そこで、リアルタイムで周波数パワースペクトルを確認できるFFTなどを用意しました。豊富な高周波の発生に驚かれた方も多かったようです)。演奏がはじまると、多くの方々期せずして床に腰をおろして見入っておられたのが印象的でした。実は、地面を伝わる振動をふくめて体感するのがガムランの響きを堪能する秘訣なのですが、こうした鑑賞のベストポイントを直観的に選択するすぐれたセンスが、わがVR学会の身上といえるでしょう。演奏後の手ほつきでは、体験重視のVR学会らしく、多くの方々バチを手にしてその響きを確認しておられました。これをきっかけに、バリ島旅行を決意された先生もいらっしやるとか。

名古屋大学での次回大会へのお誘い、今回の実行委員の紹介をへて、廣瀬通孝大会長の挨拶で懇親会はお開きになりました。人と人との出会い、他領域との出会いにみちた充実したひとときでした。

(News Letter No. 7より転載)

## 技術展示雑感

岩田洋夫

(筑波大学構造工学系)

バーチャルリアリティは一人称のメディアである以上、自分でやってみなければその真価は理解できない。つまり「体験してなんぼ」の世界である。さらに力覚フィードバックにいたっては、自身の体験がなければ、その効果を想像することすら不可能である。というような背景のもとに私は研究成果の発表形態として実演に重きをおいてきた。特に1990年代に入ってからインタラクティブメディアの興隆にともなって、実演形式の発表の場は拡大してきた。1990年からはヒューマンインタフェースシンポジウムで対話発表が行われており、1994年からはSIGGRAPHで国際公募形式のデモセッションが毎年開催されている。私はそれらの場において様々なデモを行ってきたが、今年は特に展示発表の多い年であった。まず、5月にAlife-Vが奈良であり、8月にSIGGRAPHがニューオーリンズであり、9月にはArs Electronica (コンピュータアートの芸術祭)がオーストリアのリンツであった。そして10月にVR学会の大会である。

研究室の実験装置を使って他の場所で展示発表をするには多くのバリアがある。まず、装置自体を搬入搬出に耐える形にした後、搬入搬出の段取りをつけ、現地の会場担当者で展示条件の折衝をする。起こりうるトラブルに対するバックアップを事前に用意し、さらに現地では人の手当を確保しなければならない。それらのうちどれか一つが欠けてもデモは成功しない。これを海外でやる場合には、搬入搬出と人の手当にたいへんな金と手間がかかる。

今回の大会の場合、私が出展した分に関しては特別な問題もなく成功裏に終わったと思う。国内の場合は搬入搬出にまつわるリスクがかなり抑えられるので楽なのであるが、現地会場の準備状況に成否が左右されるのは同じである。今回の場合、旭エレクトロニクスの伊藤さんが展示会場全般のめんどうを見てくれたおかげで、問題点は事前にはほとんどつぶすことができた。過去のあるイベントで展示会場の世話を責任もってやる人がいなかったために悲惨なめにあったことがあるので、伊藤さんには深く感謝したいと思う。

今回の技術展示全般を概観すると、質の高いデモが多かったが絶対数が少ないという感じを受けた。ATRの大軍団をはじめとして重装備の展示が大半をしめたが、もっと手作的なものが多くてよいと思う。先に述べたSIG-